

I うちどくのあゆみ

1. 「うちどく（家読）」ってなんですか？

「うちどく（家読）」とは「家庭読書」の略語で、「家族ふれあい読書」を意味します。昭和63年に千葉県船橋市の高校で初めて取り組まれ、その後、日本中に広まり、現在も実践されている「朝読」（「朝の読書」の略）の家庭版として考えられました。家族で本を読んでコミュニケーションを図り、「家族の絆」をつくることを目標としています。

朝の読書が日本中で行われるようになって、次に家での読書を習慣づける方策として、うちどくの企画が持ち上がりました。活動の主演となる子ども達の意見を聞くために、平成18年11月に茨城県大子町で小学生による子ども会議が開催されました。6名の小学生が話し合った内容を基にして、12月に出版・物流を扱う企業の株式会社トーハンが家読について提唱しました。

「家読」のやり方は家族で本を読んで話をするだけで、これといった決まりはありません。そのことで家族が同じ時間、同じ空間を共有することができ、楽しい時間とコミュニケーションを積み重ねていくことができます。

■コンセプト

「うちどく(家読)」は読書を通してコミュニケーションを図ろうという試みです。

学校で毎朝実施されている「朝の読書」の広がりによって、子どもの読書量は増加傾向にあります。そこで、子どもたちの読書の習慣を家庭にも広げ、家族で感想を話し合ったり、本をすすめ合ったりすることで家族のコミュニケーションを深められたら、そんな思いから平成18年12月に「うちどく」の推進をスタートしました。

また、昨今の子どもたちの体力・学力の低下は、夜更かしや朝食抜きなど生活リズムの乱れが要因と言われています。そんな中、学校での「朝の読書」は集中して授業に入れるなど生活リズムの向上に寄与しています。「うちどく」はこうした読書の効用を家庭にも取り入れ、読書体験を家族で共有することで、生活リズムの向上にもつながる活動として、国民運動「早寝早起き朝ごはん」の趣旨にも沿った活動です。

読書は個人的な体験ですが、感想を話し合ったり、人にすすめたりして言葉にすることで、コミュニケーション能力や読解力、表現力を高めることにもつながります。「うちどく」は、子どもも大人も一緒に成長し、心の豊かさを育む活動でもあるのです。

「うちどく」のやり方に特に決まりはありません。基本は“読んだ本について家族で話す”ということだけです。それぞれの家庭の事情にあわせて、習慣的に本をめぐる会話を楽しむ。同じ本を読めば会話がいつそう盛り上がります。決まりはありませんが、推進の指針として参考にさせていただきたいのが、子どもたちが考えてくれたうちどくの約束です。

小学生が考えた「うちどく（家読）の約束」

- ①家族で同じ本を読もう！
- ②読んだ本で話そう！
- ③感想ノートをつくろう！
- ④自分のペースで読もう！
- ⑤家庭文庫をつくろう！

※株式会社トーハン

「自治体・団体の推進ご担当者様向け実践ガイド」から引用

2. 伊万里市の「うちどく（家読）」は？

伊万里市では、(株)トーハンが提唱した家読のやり方を基にして、2つのルールを決めています。

①親子（家族）で本を読む

②感じたこと等を話し合う

ただし、細かい所は決めていません。家族で、学校で、地域で「どんなやり方がいいのか」を考え、話し合っ決めてところが、コミュニケーションにつながると考えています。

先に行われた小学生の「子ども会議」を受け、行政では平成19年4月に全国で最初に大子町で家読の取り組みが始まりました。

3. なぜ、伊万里市が家読を始めたか？

平成16年頃、いじめによる子どもたちの自殺が全国で大きな社会問題となっていました。ちょうどその頃に、隣県で小学生が加害者・被害者になるという悲しい事件が発生し、全国的に話題となりました。

その事件をきっかけに、伊万里市では、子どもたちのいじめのない豊かな心を育て、「思いやりの心あふれる町づくり」を進めたいと考え、市長自らの提案で「いじめなし都市宣言」を行い、行政も子どもの健全育成に関わるような施策を行うことを発表しました。

そこでまず、子ども達の心の健康と体の健康を取り戻そうと考えました。体の健康については、当時「食育」という言葉がちょうど使われ始めた頃で、地産地消の取り組みや「早寝早起き朝ごはん」といった標語によるキャンペーンを実施し、食の大切さや生活リズムの重要性を啓発していきました。

その一方で、心の健康を取り戻すにはどうすれば良いだろうかと、みんな思案していました。当時はテレビやゲームが流行し、家族が一緒にいても話をしていない状況も多くありました。学校やPTAでも、一日の中でテレビを見る時間やゲームをする時間を減らしたり、無くしたりする取り組み（ノーテレビ・ノーゲームデー）を行っていましたが、なかなか際立った効果は見られませんでした。子どもの豊かな心を育むためには、親子の会話があふれ、子どもたちが安心して居られる家庭が必要ですが、そのためには何をすれば良いのでしょうか…。

そんな時に市長がたまたま雑誌『PHP』を読んでいる時に、(株)トーハンによる家読の記事を目にしました。これだ！

「家庭での会話不足が子どもたちの心の成長に悪い影響を及ぼし、それがいじめや不登校につながっている。いじめをなくすためには家族の会話を増やすことが最良の方法」と指摘しました。

そこで、市民図書館の館長に連絡が入り、図書館を通じて読書推進の一環として、家読に取り組むことが決まったのです。

4. 家読の広がり

家読を始めるにあたり、まず黒川町をモデル地区に設定しました。平成19年6月、公民館でのおはなし会を活動のスタートとして、学校、保育園、幼稚園、公民館などが協力して、家読連絡会を立ち上げ、町を挙げて家読の活動に取り組んでいきました。翌年にはモデル地区を増やし、家読活動のための助成金を各地区に配分しました。取り組み始めた地区や町では家読フェスティバルとして、毎年イベントを公民館で行うようになりました。家庭と学校とで行っていた活動が徐々に広がっていき、地域住民にも活動を見てもらう機会を作ったことで、子どものいる世帯だけにとどまらず、様々な世代に浸透し始めました。

また、全国でも最初に取り組を始めた茨城県大子町と、青森県板柳町とのつながりを活かして、平成21年に各市町の首長が伊万里市に集まり、家読サミットを開催しました。その後、第4回まで開催される間に全国各地で家読の取組を行う自治体が現れてきました。さらに、平成25年には佐賀県と協力して、家読の九州大会「九州うちどくネットワークフォーラム in 伊万里」を開催して、市内外、県外のうちどく関係者とも交流を図りました。

市内でも、図書館や公民館でうちどくの推進に向けて取り組みは続いており、詳細についてはこの後でも紹介します。

5. うちどくと家読の違いは？

家読が始まった頃は、学校で行っている朝の読書（通称：朝読—あさどく）と対比させるように、家庭読書の略として「家読」と漢字を使って表していました。

ところが、モデル地区の黒川町を始め、市内での家読の活動が家庭だけにとどまらず、学校や地域にも広がっていき、町を挙げてみんなで家読を推進しようという流れが大きくなってきました。そこで、家庭読書の枠に収まらなくなってきたことから、従来使用していた漢字での「家読」から、ひらがな表記の「うちどく」に改めることにしました。また、「家読」が「いえどく」などと、誤った読み方をされてしまうことも多く、読み方を分かりやすく間違えないようにするためでもあります。

しかしながら、従来使用していた「家読」については、そのまま使用できます。特に、過去の取組や従来続いている行事（家読フェスティバルなど）については、「家読」をそのまま使いつづけるようにしています。

最近では、分かりやすく表現するために「うちどく（家読）」という表記を使用することもあります。